# 用 意 す る も の

- ダンボール箱　　２箱
  （10kg入りのみかん箱ぐらいの大きさが適当）
- 紙製ガムテープ（クラフトテープ）
- ピートモス　　１０～１５リットル
- もみがらくん炭　１０リットル
- 棒状温度計　　１００℃計
- かくはん用の道具（へら・しゃもじ・ゴム手袋等）
- はかり　・投入生ごみ測定用（2kgくらいの調理用等）
  ・総重量測定用（体重計等）

# ダンボール箱の組み立て方



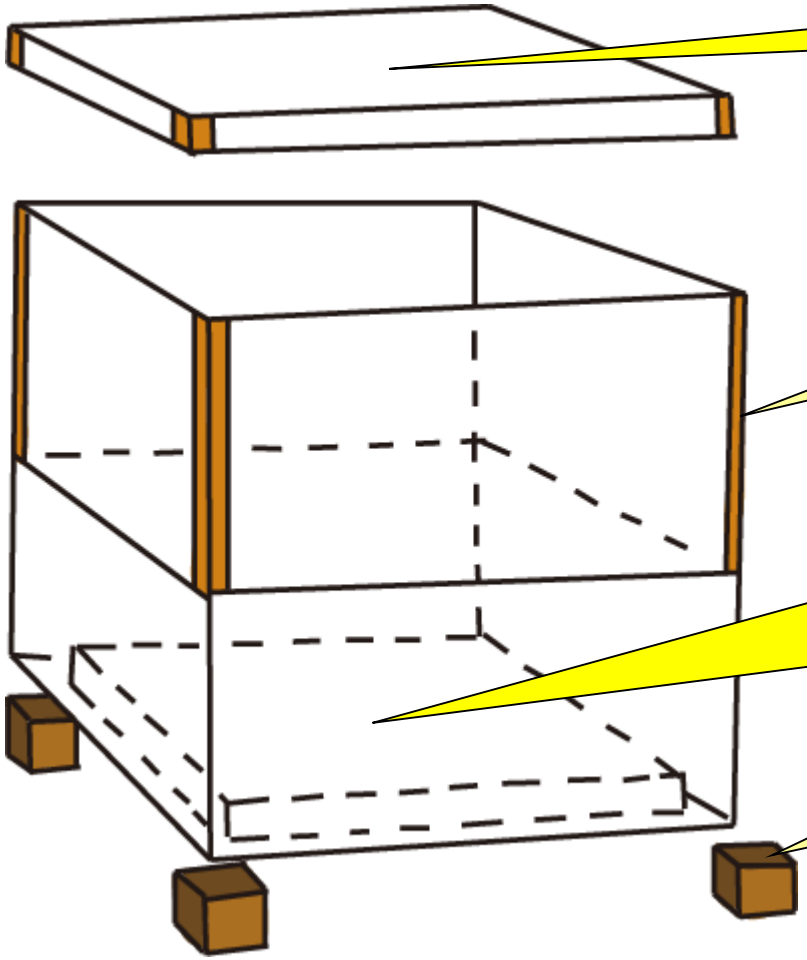
底，すきま部分は紙製ガムテープでとめ、持ち手部分を内側からふさぐ

上ぶたを立ち上げ紙製ガムテープでとめる

別のダンボールで中敷きを作り底を補強する

別のダンボールでふたを作り完成

# ダンボールコンポスト完成図



別のダンボールでフタを作る。

上フタを立て、4隅を紙製ガムテープで止めて深くする。

別のダンボールで中敷きを作り、底を補強する。
薄い板を敷く人もいる。
・・・側面も補強しましょう。

箱を床面から浮かせる。

# つくりかた

- ダンボールにピートモス：6（12ℓ）、もみがらくん炭：4（8ℓ） の割合で混ぜたものを20ℓほど入れる。

ポイント

牛乳パック（1000ml）を使って、ピートモス12杯、もみがらくん炭8杯を入れると20ℓの基材が簡単につくれます。

- その中に水またはぬるま湯を入れ、かくはんする。（コップ2杯くらい）
- 温度計をさす。
- ダンボールで作ったフタをする。

※フタは虫が入るのを防ぎ、保温や防臭の効果がある。

- 生ごみを入れるたびに、よくかくはんする。
- 温度が上がれば、水分がとび生ごみの分解が進む。

# 生ごみの投入のコツ

- 温度が高く、風通しの良いところに置く。
  ※温度が低いと微生物の活動が弱まり、生ごみの分解が進まない。（温度は15℃以上が望ましい。）

- 生ごみは新鮮なうちに入れる。

- 大きいものは、小さく切ってから入れる。
  ※生ごみを小さく切ると、分解が速く、かき混ぜやすい。

- 一日の投入量は500g～600g程度を目安とする。

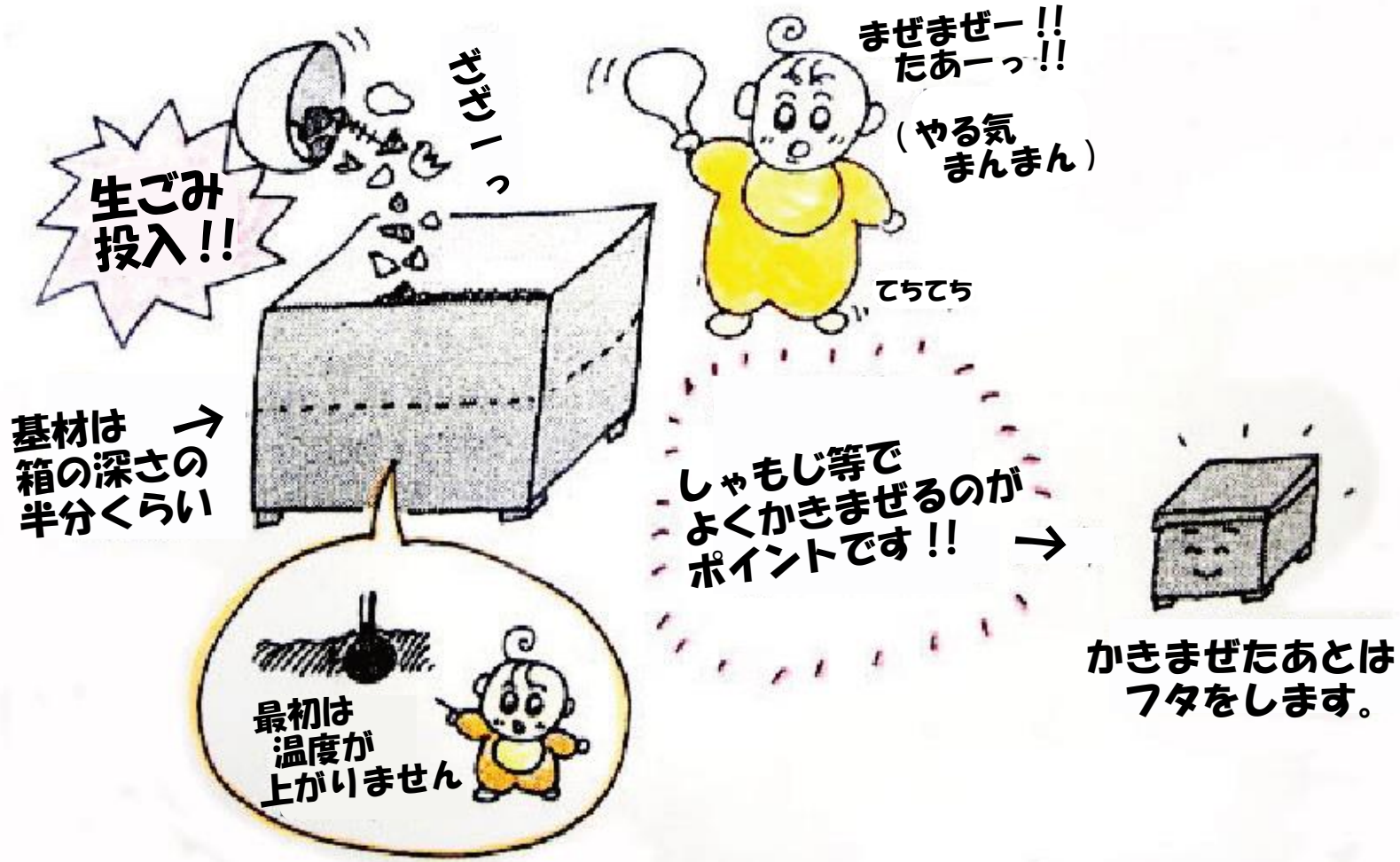
- 魚のあら、イカゴロを入れるときは、少量にするか、火を通すか、湯通しすると臭いを防げる。

# 投入しないほうがよいもの

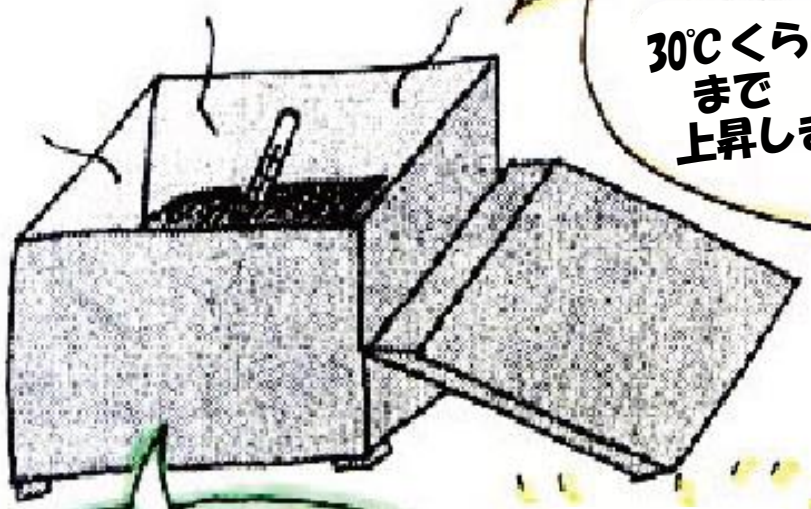
- 腐った生ごみ
- 塩分の多い生ごみ（塩鮭・塩辛・たくあんのぬか床など）
- 大きな骨
- 種（梅干し・かぼちゃ・スイカなど）
- 貝殻

# 生ごみ堆肥のできるまで・・・

## ① 始めてから10日間くらい



# ② 2週間後～



30℃くらい
まで
上昇します

わあ!

元気がないときは
米ぬかや使用ずみの
揚げ油を少し入れると
いいです。

元気でた～

毎日生ごみを
入れて
しっかり
かきまぜよう!!

もぐ
もぐ

おいしい
おいしい

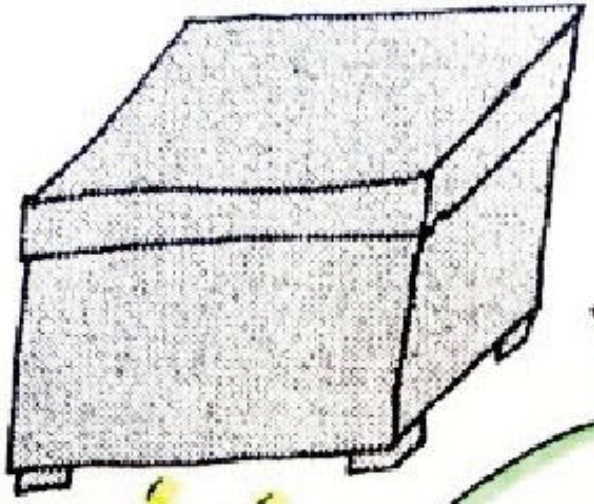
んぐ
んぐ

働く微生物
たちの図

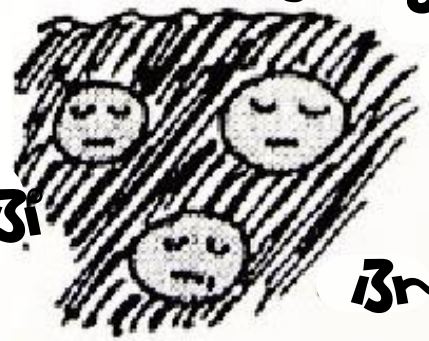
※15℃くらいでも
発酵分解は進んでいるので
大丈夫！

※小バエが発生したときは
米ぬか・廃油（揚げ物をしたときに出る
使用済みの油）を入れて温度をあげてみて！
（40℃くらいで死滅します）

# ③ 2～3ヶ月後

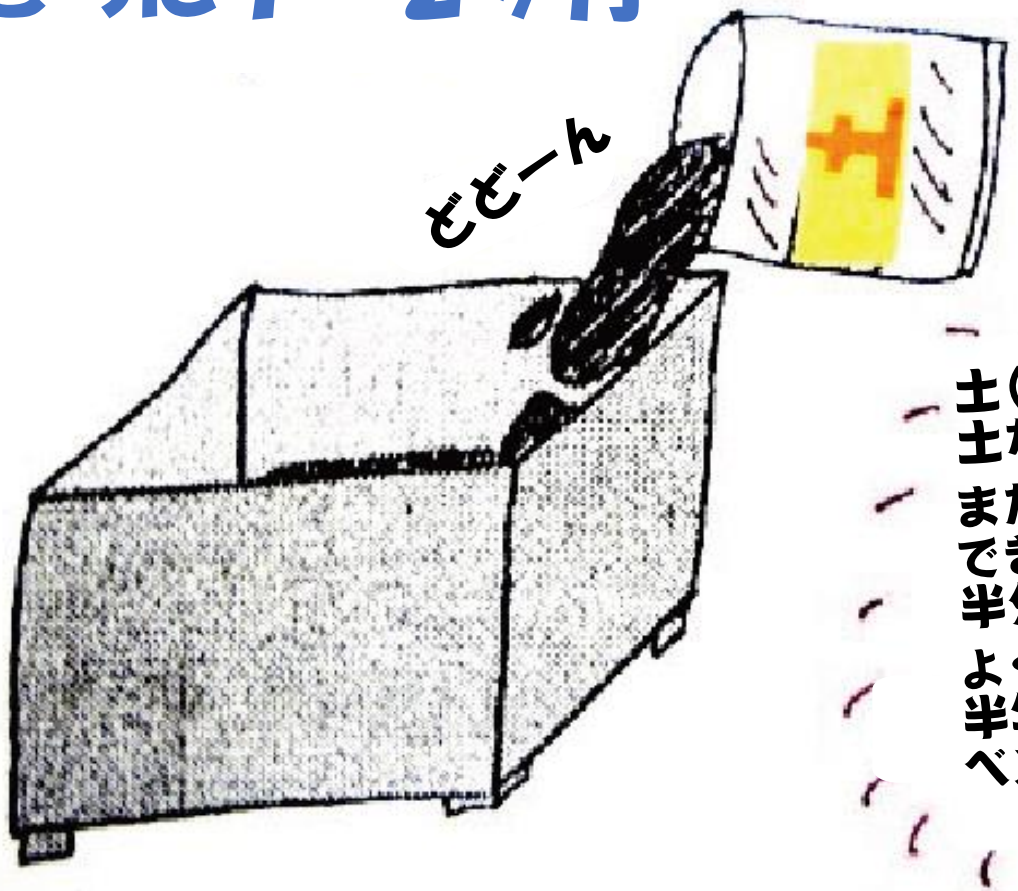


基材がべたついてきたら、ダメになってきたら、終了します。




満腹になった微生物たちの図

# ④ 土を混ぜて さらに1～2ヶ月




土(庭やプランターの土など)を入れます。

また，土の量は，できあがった堆肥の半分くらいを入れます。

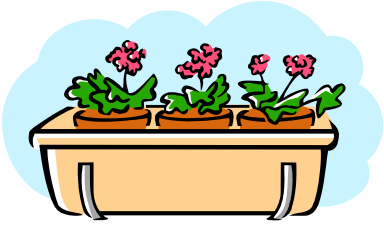
よくかき混ぜフタをして半年くらい寝かせるとベスト!!

# できた堆肥の使い方（目安）

## 堆肥はどれくらい施せばいいの？

**畑の場合**　１㎡当たり３～５ℓ

**プランターの場合**　土の量の１０％程度



## 堆肥はどのように施せばいいの？

種や苗が直接堆肥に触れないように！

**全面施肥**　畑全体に施肥し、軽くすきこむ。
２週間くらい経ってから種や苗を植える。

**植穴施肥**　ひと掴み程度を入れ、土を３㎝くらいかぶせ、その上に苗を植える。

**溝 施 肥**　畝の脇に溝を掘って堆肥を入れ、その上に土をかぶせてから種や苗を植える。

**株元施肥**　追肥時に、苗の株元や畝の肩部分に１～２掴み程度を施肥する。

# 成功のポイント

**水分状態を50％（握りしめたときに「ふわっ」と割れる硬さ）位に！**

**強く握りしめた時、手に水気を感じる程度に！**

## 生ごみは新鮮なうちに

**水を切り**

ベタベタにならないように。

**小さく切って入れ**

微生物が食べやすいように。

**しっかりかき混ぜましょう！**

微生物の働きを活性化するために酸素（空気）を送る。

**そして、フタをしましょう！**

防虫、防臭、保温のために。